

令和 5 年度 学校評価シート

学校名：和歌山県立桐蔭高等学校					校長名：川 鳶 秀 則						
目指す学校像・育てたい生徒像（スクール・ポリシー等に基づいて記載する） ・自ら人生を切り拓く人を育てる学校 ・自己の在り方生き方について主体的に考え、高いレベルでの自己実現に向け、幅広い教養と課題解決能力を身につけた生徒 ・「文武両道」の実践を通して自主性と人間力を高め、トップリーダーとして社会に貢献できる力を身につけた生徒					学校評価の公表方法 保護者に対して自己評価及び学校関係者評価の結果を知らせるとともに、本校ホームページにおいても広く公表する。			現状・進捗度	A	十分に達成している。（80%以上）	
									B	概ね達成している。（60%以上）	
									C	あまり十分でない。（40%以上）	
									D	不十分である。（40%未満）	
自己評価（分析、計画、取組、評価）										学校関係者評価（3月12日実施）	
番号	計画・取組				評価（2月14日現在）						
	重点目標	現状	具体的取組	評価項目と評価指標	進捗度	進捗状況	今後の改善方策				
1	高い進路目標を実現させるための組織的かつ系統的な取組の充実及びキャリア教育充実深化に向けた具体的方策の構築	B	「桐蔭ゼミナール」での探究活動において、和歌山大学などの外部機関との連携により実施する。 学年集会や面談時の資料、進路だより、LHR による情報提供及び生徒の高い志望をあきらめさせない支援を行う。 FD 宣言のもと中高全教員が研究授業・定期考査問題作成により授業力を付け「系」の求めるレベルの授業を実施する。「系」選択が生徒自身の意思決定でなされるよう情報を提供する	・探究テーマに対する調べ学習以外の探究活動が行われたか。 ・難関大学出願者数 120 名 ・進路アセンブリーの実施 ・進路だよりの発行 ・研究授業および研究協議が実施できたか。 ・「系」選択が生徒自身の意思決定でなされ、求める授業内容が実施できたか。	B B B	高2生の学校内での探究活動は活発に行われるようになってきたが、和太へ行つての探究活動までは実施する班がなく実現することが出来なかつた。 早期から志望校に対する意識付けを行うために、現職教育や進路アセンブリーの内容を見直した。 ・研究授業の必要性の意識は高まつたが、実際に実施する教員数は60％程度だった。 ・「系」選択時に志望校について真剣に考える様子は見られ進路意識の啓発もあった。	・高1については探究課題の設定に関してその道筋と教員の関わり方を構築する。高2では、和太への研究活動を実施できそうな内容については積極的に和太へ行かせる。 ・現職教育や学年の会議を通して、教員間での生徒共有を密にしていき、進学に関する生徒への声かけを学年全体で行えるようにしていきたい。 ・授業改善のための研究協議をつけた研究授業を実施し個人でも研究授業を年1回は実施する。	・充実したキャリア教育により、進路選択等に関し、生徒に情報提供ができています。 ・生徒が自ら課題を発見し考察する自主的な授業や参加型の授業が多く見られる。 ・教員も、単に知識を教えたり直ぐに解答を教えたりしないで、生徒の自主的な勉強姿勢を見守る辛抱強さが見られる。 ・公開授業・研究授業により教員の指導力向上を図っている。 ・学内定期考査等の分析を通じて、授業の効果が上がっているかどうかどうかの検証を行おうとしている。 ・進学の意向や精神的な悩みについては、生徒に声かけを積極的に行っている。 ・自主的な授業や参加型の授業では、授業の効率性・効果を高めるために、生徒たちに事前の準備を求めるとともに、教員の方でもファシリテーターとしてどのような助言をするのか等の点に関する授業の準備が必要となる。これらの点について工夫改善がないと、時間がかかった割に効果が上がらないという結果に終わる危険がある。 ・新学習指導要領で求められている教育を行うためには、今後、大学入試の共通テストや各大学の入試問題の分析を行つて、良問についてはそのエッセンスを抽出し、授業に生かしていくことが必要と考えられる。 ・教員の指導力向上のため、同一教科を受け持つ教員による普段からの会議が必要になる。ときには、他校の教員のとの Web 会議なども考えて良いのではないか。 ・不登校などの課題を抱えた生徒には担任だけの課題とするのではなく、全校的に教職員が知恵を絞つて適切に対応することが必要である。 ・適性が把握できており潜在的能力が高いと考えられる生徒には、高校での教育レベルを超えた高度な教育に触れる機会を付与し、キャリア教育も生徒の適性・能力に合った内容とすることも考慮すべきであると思われる。 ・大学教授の講義を受講する桐蔭総合大学や、現地で探究活動を行う桐蔭ゼミナール、スタンフォード e-w a k a y a m a など、生徒の個性や目標等に適応した幅広い取組に引き続き積極的に取り組んでいただきたい。 ・教員の指導力向上に向けて、研究授業を実施することや、知識伝達から考えさせる仕掛けづくりへの転換は、これからの教育に不可欠であると感じた。さらに人間的な魅力ある教員の育成にも取り組まれたたい。 ・今後ますます人工知能などの技術革新が進展する中、未来を拓くこどもには、個性や感性、創造力を伸ばす教育がさらに求められると感じており、桐蔭高校の「文武両道」の実践を通した自主性と人間性を高める教育に大いに期待します。 ・県下一の公立校として内外から様々な期待や要望が集まって大変だと思いますが、その期待や要望にしっかり対応できていると感じました。 ・高い進路目標を実現させることと併せ、一人一人に寄りそう指導をお願いしたい。 ・中学生と高校生がお互いに刺激を与え合うような行事があるといい。 ・少子化の中、より桐蔭らしさを追求し今まで以上に魅力ある学校にしてください。 ・進学校でありながら、自由闊達で生徒の自主性を引き出すような様々な取組がなされており高く評価できます。個人的には、今後も大きな特色（国際交流やスポーツに特化）だけを持つのではなく、全方位的に生徒の個性を伸ばす（つぶしの利く）環境であれば良いと思います。			
2	主体的な学習姿勢の育成につながる教員の更なる指導力向上	B	新学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びの実現のため、授業改善を行う。 授業を通して家庭学習の必要性を認識させる。 学年会、教科会での情報交換、協議の実施。定期考査の分析および対策。	・公開授業や研究授業を年1回行う。 ・授業アンケートを実施し授業改善の状況を確認する。 ・授業アンケートを実施し、家庭学習の定着状況を確認する。 ・考査問題が生徒評価に適正なものであるか。 ・家庭学習用課題や小テストが適正であるか。	B B B	・昨年に比べると実施率は上昇したが、充分ではなかつた。 ・アンケート結果から課題共有する。 ・学校生活が慣れるにしたがい、学習時間が増加するものと、ほとんど行っていないものの二極化している。 ・2学年までが観点別評価になり、教科間での情報共有や授業内容についての共有は進んでいる。	・研究授業実施時期を1学期に設定する。また、授業参観回数についても具体的に設定する。 ・課題を与えるのではなく、自ら学習に取り組む仕掛けについて研究・協議を進める。 ・評価については一定教科間で共有が進んでいるが、評価の尺度や観点3の主体的に学習に取り組む態度についてはさらなる研究をする。				
3	生徒の自主的・自律的な生活習慣の確立と生徒支援の充実及び生徒の主体的な活動を支援する取組の充実	B	自己責任の遅刻を5回以上繰り返す生徒への指導や、日常的な身だしなみ指導。 教育相談体制の充実。生徒情報の共有と把握による生徒理解、並びに具体的な手立ての共有。 生徒会を活性化し、生徒の主体的な行事運営を促す。効果的な LHR 計画構築する。部活動を支援する。	・遅刻者数の増減と個々の事情の把握ができたか。 ・生徒が自主的・自発的に行動し、自己管理能力を身につけることができたか。 ・カウンセリングやケース会議が適切に実施され、具体的な情報共有ができたか。 ・生徒会活動や行事活動、LHR の内容と時間が適正か。 ・部活動満足度や退部者数が適正か。	B B B	・全学年とも約 50 件遅刻数が減つた。 ・ほとんどの生徒は正しい身だしなみ生活できている。 教育相談を年間約 100 回程度実施し、その都度ふり返しを行い情報共有することができた。また、ケース会議は必要に応じて実施することができた。 特別活動に割く時間は一定確保できた。行事や部活動は活発に行われているが、より充実させることができる。	・登下校中の交通事故の報告が昨年度の半分になった。規則正しい生活をして安全に余裕を持って登下校するようにこれからも継続して指導していく。 ・心の不安定な生徒に対しては、ケアも含め生徒にあった声かけをしていく必要がある。 ・行事や生徒会活動の情報提供・発信を活発化させ、限られた時間の中で活動の質を高める。 ・壮行式や表彰のかたちを整えることで、部活動への意識を高める。				